小さな命
お蚕さんから広がった学び

―フリースクールでの蚕の飼育と繭づくり―



ぐんま里山学校の建物は、かつて養蚕が行われていた古民家です。

蛾やイモムシに興味を持った子どもたちの「カイコを飼いたい！」という一言から、昔お蚕さんを育てていた建物に、再びお蚕さんがやってきました。

特定非営利活動法人ぐんま里山学校

活動期間：2025年9月～2026年8月



「カイコを捕まえたい！」から始まった

里山学校では、普段から昆虫観察や里山の自然観察を行っています。蛾やイモムシに興味を持った子どもたちは『イモムシ・ケムシ図鑑』を見て、「カイコを捕まえたい！」と言い始めました。



しかし、図鑑で見たようなカイコは、里山を探しても見つかりません。調べるうちに、蚕は人とともに生きてきた昆虫で、野外で自然に暮らしているものではないと知りました。そこで、子どもたちとスタッフは「どうしたらカイコに会えるのか」を一緒に調べ始めました。





カイコをつかまえたい！！

探しにいこう！

ライトトラップにくるかな？

どうしたら、カイコに会えるの？

活動の目的

- 子どもたちが興味を持ったことに、とことん取り組む
- 一つの興味を、自然・科学・地域文化・命・ものづくりへ広げる
- かつて養蚕に使われた古民家に、蚕のいる風景をよみがえらせる

2025年9月、初めての飼育が始まった

子どもたちと一緒に調べ、群馬県蚕糸技術センターへ相談しました。そして、蚕の卵をいただき、2025年9月に初めての飼育を始めました。小さな卵から生まれた蚕は、驚くほどの勢いで桑の葉を食べました。毎日の世話を通して、子どもたちは蚕の体、動き、食べ方、糞を間近で観察しました。



小さな蚕をじっくり観察



桑の葉を勢いよく食べる



毎日の変化を近くで見る

発見・つぶやき

- とにかくたくさん食べるなあ。
- とにかくたくさん糞をする。
- 朝あげたのに、もう食べきってる！
- フンもいっぱい！とんできた～💦
- 蚕を持つの楽しい！冷たい。
- 桑の葉っぱがもうなくなりそう。。
- 桑以外食べないのかなあ？
- 蓋をしなくても、逃げないね。
- 脱皮前は動かないし、食べない。
- あ！このこ脱皮中・・・
- おしっこもした？
- 新鮮な葉っぱをあげよう！
- たくさんのフン、使えないかな？
- このこだけ小さいね。







蚕を飼ったら、いつもの風景が変わった



蚕のために桑を運ぶ

飼育を始めたのは、秋が深まり始める9月でした。蚕は毎日たくさんの桑の葉を食べるため、青々とした桑を探すことが日課になりました。

最初は桑の木が分からなかった子どもたちも、毎日探して歩くうちに、里山のあちこちに桑があることを発見。それまで通り過ぎていた道端の植物が、蚕を育てる大切な存在に変わりました。



つめたくて、ふわふわ！



食べる音好きー！！

桑を探していることを知った地域の方が、畑の葉を分けてくださることもありました。小さな蚕の飼育から、地域の方とのつながりが生まれました。ある朝、校庭の桑の葉が一気に落ち、子どもたちは季節の変化と自然の不思議を目の前で体験しました。不思議に思って調べてみると、気温がある温度まで下がると、一斉に葉を落とすことがあることが分かりました。この体験も、蚕の飼育を通して、桑の木を毎日見るようになったからこその気づきでした。

繭になった。でも、そのあとどうする？

成長した蚕が繭を作り始めました。子どもたちは、蚕が落ち着いて繭を作れるように、「お部屋」を急いで用意しました。やがて、蚕の姿は白い繭の中へ消えていきました。

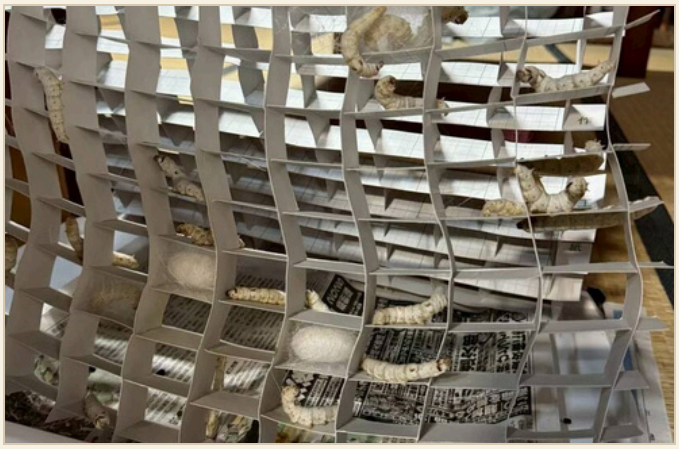
初めての飼育では、できた繭を活用するため、繭を冷凍して乾燥させました。しかし、その後、「みんな死んじゃってかわいそう」「蛾にしてあげたかった」という声が上がりました。



繭を作る「お部屋」を準備



一つずつできた白い繭



蚕が落ち着ける場所を考える

糸はいて、
蚕さん、
縮んできちゃった。。

早く作らないと、
みんなお部屋を
探してるかも。

もう、食べないね。
ずっと糸はいて、
お腹空かないかな？

みんな死んじゃうなんて、
かわいそう。
みんな、
蛾になりたいんじゃない？

蚕をかわいがって世話をしたからこそ生まれた気持ちでした。繭を利用することと、命をつなぐことを考えた経験が、翌年の飼育方法につながりました。

蚕は、ずっと人と一緒に生きてきた

2025年10月28日の群馬県民の日に、群馬県蚕糸技術センターを訪問しました。そこでは、蚕にもさまざまな種類があること、蚕が長い時間をかけて人の暮らしとともに生きてきたこと、繭から生まれる糸が人々の生活や産業を支えてきたことを学びました。



さまざまな繭を間近で見る



黄色い繭をいただきました



いろんな種類の蚕がいることも知った

里山の自然の中で捕まえることのできなかったカイコが、なぜ人の手を必要とするのか。実際に飼育した経験と、センターで学んだことを結び付けて考えることができました。

こんな色の
カイコもいるの！？

やっぱり、カイコ好き！

たくさん糸を作るためには、
いーっぱい飼わないとだね。

**「捕まえる昆虫」から、
「人とともに生きてきた昆虫」へ**

子どもたちの蚕への見方が広がりました。

2026年、二度目の飼育に挑戦

「またカイコを飼いたい」という子どもたちの声を受け、2026年も飼育に挑戦しました。今度は桑の葉が豊富にある時期に始めました。前年の経験がある子どもたちは、慣れた手つきで桑を与え、飼育箱の掃除や蚕の移動を行いました。初めて蚕に出会う子どもたちには、先に経験した子どもたちが世話の仕方を伝えました。



みんなで桑を与える



初めての子にも世話を伝える



桑の木に登って、葉っぱあつめ

たくさんの蚕が一斉に繭を作る時期には、部屋を用意するのも大仕事。それでも、子どもたちは蚕が落ち着ける場所を考え、一匹ずつ大切に入れていきました。

経験が次の人へ

前年に蚕を飼育した子どもたちの経験は、二度目の飼育を迎える中で、初めて蚕に出会う子どもたちへ自然に受け継がれていきました。桑の葉の与え方や蚕の持ち方、飼育箱の掃除の仕方などを、経験した子どもたちが実際にやって見せたり、そっと教えたりする姿が見られました。教わるだけでなく、自分の経験を誰かに伝えることも、新たな学びとなりました。

虫が苦手な子どもの中にも、「蚕は好き」と話し、ためらいながらも手に乗せてみる子がいました。また、蚕の名前は聞いたことがあっても、実際に見るのは初めてという子どもも多く、総勢30名以上が蚕を見たり、触れたり、成長する様子を身近に観察したりする機会となりました。それぞれが無理のない距離から関わり、少しずつ蚕への興味や親しみを深めていきました。さらに、「もっと近くで育ててみたい」と蚕を家庭へ持ち帰り、里山学校が休みの日にも桑の葉を用意して、世話に挑戦した子どもが数人いました。蚕との関わりが里山学校の活動時間だけにとどまらず、家庭での観察や飼育へと広がったことで、子どもたちの主体的な学びと新しい挑戦につながりました。

前年の気持ちを、次の飼育に生かした

二度目の飼育では、前年の「蛾にしてあげたかった」という思いを生かし、羽化させる繭と、工作や糸取りに使うために保存する繭に分けました。中には、うちわの骨に糸をはかせて、シルクのうちわ作りにチャレンジした子もいました。

繭から出てきた蛾は、幼虫の頃とはまったく違う姿でした。それでも子どもたちは「蛾もかわいい」と感じ、大切に観察しました。



羽化させる繭と、残す繭を分ける



成虫になったよ！



繭から生まれた作品

繭工作では、繭の中から出てきた死んでしまっている蛹をじっくり観察する子もいました。「かわいそうだけど、繭ありがとね。」と大切そうに繭を手に取る姿がありました。

フンまで活用！アップサイクルにチャレンジ

飼育する中で、たくさんのフンも何かに使えないかという意見が出ました。普段から飼育している動物達のフンを畑の堆肥にしている子ども達だからこその気づきだったと感じます。蚕の糞から、嫌なにおいではなく桑の葉のようなよい香りがすることに気づき、調べると、蚕の糞は「蚕沙」と呼ばれ、お茶にも利用されていることが分かりました。無限アップサイクル合同会社様の協力でお茶に加工し、蚕のお茶を楽しみました。捨てると思っていたものが、新しい価値を持つ体験になりました。



お蚕さんがいる風景を、これからも

蚕の飼育は、図鑑の中で見つけた小さな興味から始まりました。「カイコを飼ってみたい」という思いを出発点に、昆虫の成長の観察、桑の木の発見、季節の変化、地域の方との交流、群馬の養蚕文化、命との向き合い、繭を使った工作へと、子どもたちの学びは次々に広がっていきました。

子どもたちが抱いた疑問を一緒に調べ、日々変化する蚕の様子を見守る中で、関わるスタッフにとっても多くの発見と学びがありました。子どもの興味をすぐに答えへ導くのではなく、一緒に驚き、考え、試してみることが、新たな学びにつながることを改めて感じました。

かつて養蚕が行われていた古民家で、再び蚕と子どもたちが暮らすようになりました。蚕が特別なイベントのときだけ現れる生き物ではなく、里山学校の日常を形づくる一つの風景になることを願っています。「今度は繭を染めてみたい」「糸を紡いでみたい」と、次の興味も生まれています。お蚕さんから広がる新しい挑戦は、これからも続いていきそうです。











